

PRo-miTImES

第6版

石川建築学科長 インタビュー

この春、建築学科長に着任された石川恒夫教授から建築の道を志す皆さんにメッセージを頂きました。

建築学科の魅力を教えてください。

計画、構造、設備などの座学、設計製図や模型制作の実習はどの大学でも学びます。本学ではそれに加え、段ボール椅子、版築と、実物をつくる授業があります。特に、版築制作は本学にしかないもので、今年、日本建築学会教育賞を頂きました。

バウビオロギーの講義も日本では本学にしかありません。環境への配慮に加え、健康な住まいと暮らし方に取り組むドイツ発祥の分野です。ドイツでは半世紀前から注目されており、本学では二十年前から講義を行っています。

設計製図の課題について、本学は公立の大学でもあり、前橋市内に敷地を設定することで、課題を解くとともに、街を知る機会にもなっていると思います。

学科再編による教育プログラムの変化はありますか？



土を突き固めてつくる版築

幅広い眼差しをもった人材を育てたいと、現状三学科を一つの「学群」としてとらえ、共通の基礎教養をたくさんしてもらい、二年生から専門分野（プログラム）に分かれます。建築は文理を融合した学びをもと必要としていますから、幅広い学びは元々必要でした。学ぶことに意欲的であればあるほど、新しいカリキュラムは有効だと思います。建築の学びそれ自体が大きく変わるわけではありません。四年間、系統立てて学べるので、卒業できれば今まで通り建築士の受験資格を得ることはできます。

このカリキュラムを通してどのような人になってもらいたいですか？

人への関心、世界への関心を持ってもらいたい。四年生で卒業研究を

やりますが、研究は個人の関心からしか始まりません。自分自身の関心を、世のため、人のため、未来のために客観化するのが研究です。教員は適切にサポートしますから心配しないで。自分の関心に応じて研究室を選び、その世界に飛び込んでいくのです。

建築は政治・経済とも密接に関わり、そして翻弄されまゝ。建築は権力に負担することもあり、人々の生きる支えにもなります。長い時間を生きるために、継承しようと努力されている方もいます。建築は一つの大きなドラマです。それを知るだけでも研究になります。

どんな高校生に来てもらいたいですか？

人やモノへの関心がある人、手を動かしてモノを作ることが大好きな人に入學してもらいたい。自分の関心を表明して、自分から動いて、共感できる仲間とともに始めてみましょう。それが大学です。

建築の魅力とは？

建築の道を志す学生に向けて

「幾何学」と「文学」に関心を持って欲しい。大学入試では自然科学科目が必須ですが、建築は本来、総合なのです。世間で言う文系、理系が融合したものだといえるでしょう。その中で文系では「文学」、本をたくさん読んで欲しい。論理展開を作者の気持ちになつて楽しみながら読む。それがデザイン思考に昇華されます。理系では「幾何学」、形への関心、形への直感を育んでもらいたい。「幾何学」は丸みだたいなもので、ある程度数をこなして慣れ、形に親しむことが重要です。自分の思考の中でモノを回転させて立体的に形を捉える力を育むことはすごく大事です。



ダンボール椅子の展示会



我がが石川建築学科長
一級建築士を持っておられる建築家でもある

建築学科は本学のように工学部に属していますが、芸術でもあります。芸術は感動です。また、建築は長い時間を生き抜くので歴史的なこと（「歴史」）、大きなお金も動き「経済」と言う問題も避けられません。そして、建物は人が使うものであり、人との関係、人の気持ちを理解し、寄り添うことも大切です。そうすると人間心理への理解も大切になってきます。「工学」「芸術」「歴史」「経済」「文学」「心理」全てを総合していくのが建築だと思えます。

前橋工大には6学科ありますが、その意味で建築学は独特のポジションを持っています。人と人との出会いから生まれてくる、それが建築です。若いみなさんには、建物をたくさん見るとともに、そこにいる人と

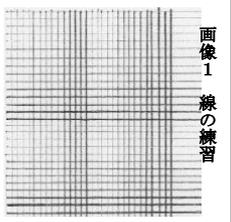
出会って、話しをして、そこから気づくこと、気付かされること、それが建築の学びにはとても大事だと思えます。（二年 古土井）

建築学科の授業って

最初は何をするの？

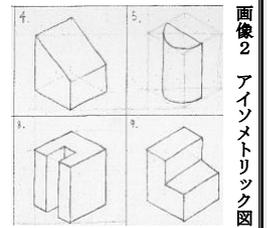
建築学科は、理系の学科の中では特殊なイメージを持つ方も多いのではないのでしょうか。実際、大学の授業では珍しい「製図」の授業があります。今回は、現在建築学科一年に在籍する筆者が前期に実際に受講した、「建築設計基礎Ⅰ」（担当…石川教授）の授業の紹介をします。この記事によって、皆さんの建築学科のイメージがクリアになったら嬉しいです。

「設計」と言っても一年前期の授業では、いきなり自分で考えた建物を設計するわけではありません。では最初に何をするのかと尋ねると、立体を捉える力と、定められた通りに図面を描き、読み取る



画像1 線の練習

うと、立体を捉える力と、定められた通りに図面を描き、読み取る

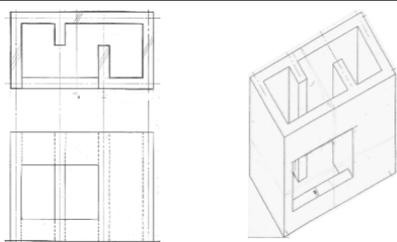


画像2 アイソメトリック図

能力を身に付けることを目的とした授業が行われます。最初の授業では、道具の使い方と、線の引き方について学びました。（画像1）製図には様々な決まりがあり、線の太さや点線の種類によってそれぞれ役割が異なります。それぞれの線をはっきりと区別して引けるようになるために、その後の授業や自習では何本もの線を繰り返し描きました。このような、線を描き分ける練習が、図面を正しく描き、読み取るための基礎となります。

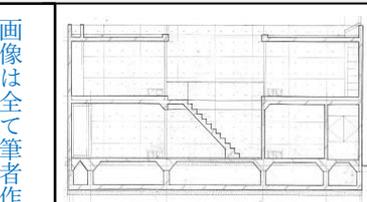
次に、二次元平面上に、三次元の立体を描くための方法を学びました。アイソメトリックやキャビネット等の投影図法、透視図法という奥行きを表現する方法などを学びます。

（画像2）立体を平面上に描く様々な方法を知ること、立体を正確に捉える力をつけます。さらに、与えられた平面図を読み取って立体的な図を描く



画像3 立体から平面に変換

授業プリントより引用



画像4 住吉の長屋 断面図

画像は全て筆者作

く練習と、反対に立体的な図から平面図、断面図を描く練習をしました。（画像3）最後に、前期の後半では、実際にある建物の設計図を描く練習をしました。私たちは、「住吉の長屋」という、単純な構成の安藤忠雄の名住宅を教材にして学修しました。具体的には、平面図や断面図を描き写して、図面の描き方を学びます。（画像4）元になる図面を同じように書き写すだけです。寸法の読み取りや描く順序を考えるのに苦労しました。最終的には、A1のケント紙に、その建物の特徴が伝わるように自分で選んだ図面や絵などを描いたパネルを作成しました。とても時間のかかる作業でしたが、完成した後は大きな達成感が得られました。

以上が「建築設計基礎Ⅰ」の大きな流れです。この他に授業では毎回、先生から建築との向き合い方など様々なお話を頂きました。お話からは、先生の建築に対する深く熱い思いを感じ、私たちの熱意も高まりました。この新聞を見た皆さんが建築学科に興味を持ってくださると嬉しいです。

（二年 鈴木）